

【9 島鉄バス Shimatetsu Bus】



南島原市南有馬エリアの白木野棚田から(左奥は島鉄バス)

島鉄バスでは、島原半島内を網羅するように展開されている各定期路線の区間のうち、山側の視界が開けたところからは雲仙岳が眺められ、全体では“[360度の雲仙岳](#)”が眺望できます。具体的には、山麓の海沿いをぐるっと周回する路線からは、[雲仙岳](#)の山々の組み合わせや見える角度が時々刻々と変化していき、[雲仙岳](#)のやや遠景の多彩な表情が見られます。また、島原半島東部の島原市街地周辺を回る路線からは、近くにそびえる眉山と奥にそびえる平成新山というセットを核として、場所によって両山との位置関係が変化して様々な構図の[雲仙岳](#)が見られます。半島東部の島原市街地から[雲仙岳山中・雲仙温泉](#)を越えて西部の小浜温泉に至る路線からは、麓からの遠景とは対照的な[雲仙岳](#)の近景が、ゴルフ場～札の原バス停の区間で見られます。

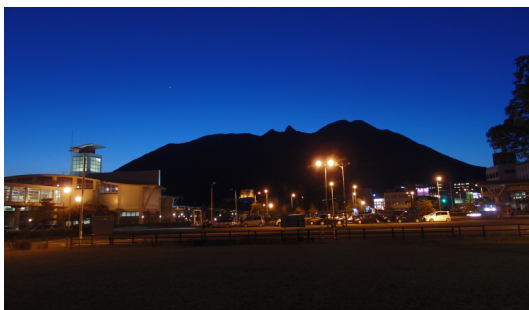
島原半島の北部～東部～南部の路線から眺められる有明海には、全国一の規模を誇る干潟が広がっていますが、その干潟の泥は、かつての[阿蘇山](#)の大噴火による噴出物を筑後川や白川などが日々流し込んでいるもので、その泥が外洋に流れ出さないのは、[雲仙岳](#)そびえる島原半島が有明海の水の出入口を狭めているためです。また、半島東部の区間からは、[阿蘇山](#)が眺望できることもあり、[阿蘇山](#)と[雲仙岳](#)の間の歴史的な[大三角形](#)(※阿蘇地域のページ参照)を視覚的にイメージすることが可能です。

なお、バスの車体の白地に赤線三本(スリーレッドライン↓)の装飾は、春のミヤマキリシマ、夏の天草灘の夕日、秋の紅葉、冬の霧氷(白)を表し、雲仙天草国立公園の魅力を表現したものとされていますが、本社元役員で“まぼろしの邪馬台国”を執筆した宮崎康平氏の考案とされています。

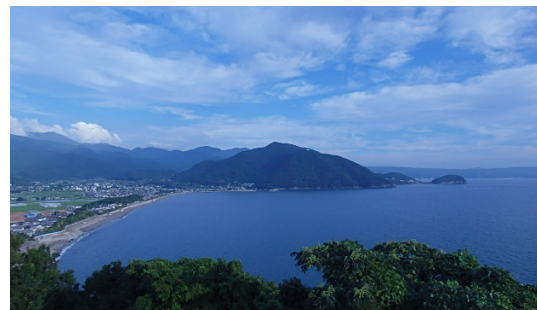
[雲仙岳](#)の様々な表情を探しながら、島鉄バスで旅してみませんか？

● 島鉄バスの情報はこちら↓

島原鉄道株式会社 http://www.shimatetsu.co.jp/one_html3/pub/default.aspx?c_id=13



島原港バス停付近から



千々石展望所(塩屋～愛野展望所バス停)から



島鉄バスと眉山と島原の精霊(しょうろう)船